



これは何でしょう



答えについての思い出などもお待ちしています。

□しめきり 11月11日(金)必着
 □あて先 〒7783 南国市大
 坪甲二三〇一 南国市企画課
 親子クイズ係
 □賞品 正解者の中から抽選で
 5人の方に図書券を進呈
 ◎第281回親子クイズの答えは、
 (愛わ)の帽子でした。

第280回当選者発表(敬称略)
 (応募総数)11通

寺嶋正朋(藤原)
 門田昌明(植田)
 中石 忍(藤原)
 中村千代子(稲生)
 柳瀬 亮(久礼田)

思い出がいっぱい

◆今年が日がよく照ったのでお世話になりました。五月の中ころから十月の中ころまで、しっかり使っています。(松下智香)

◆私の子供のころは、夏になると今は亡き母が「帽子をかぶらんと頭が痛くなるぜよ」といって走りまわってきたかぶせられたものです。今の子供はあまり帽子をかぶらずに遊んでいるのを見かけます。時代も変わりつつあるんだなあと思つて今日このころです。(川崎則行)

◆友人が最近にしてはめずらしく買って、ほろほろになるまでかぶっていたのが印象に残っています。(寺嶋正朋)

◆小学生のころ、お母さんに言われてよくかぶっていたわきわら帽子。居間床余りかぶることもなくなくなりました。壁にはり付けてインテリアのひとつです。(藤原麻美)

◆私にとっての帽子の思い出といえば、小さいころ、セミトりに行くとき色々な帽子をかぶって行ったことです。(中村千代子)



広場



人々の生活に深い爪あとを残す阪神大震災。たくさんの犠牲者を出し、今なお避難所や仮設住宅での生活を強いられている人も少なくありません。

そんな被災者の生活を少しでも

仮設住宅の高齢者の方に想いを寄せて

阪神大震災で被災され「仮の町」仮設住宅で暮らしている高齢者の方がたくさんいます。住みなれた家と共に、隣人関係も失った今、年金だけで生活されている方々のうちには、食べる物もなく、胸の内を打ち明けられる人もなく、「孤死」される方が相次いでいます。こんな高齢者や障害者の方々のために「ベルボックス」と名付けられた通信システムがボランティアの方々の手で始められています。アの方々の手で始められています。電話に通信機を接続し、ペンダント式の発信ボタンを押せば二十四時間ボランティアの方々が始めて「二元資料本部」に発信のメッセージが流れ、スタッフが折り返し電話を入れ、急病や応答がない場合は消防署などに通報する仕組みです。緊急の場合だけでなく、お年寄りの話し相手になって震災の

助けようと、ボランティア活動を続けている人たちもいます。そんな被災地の現状を少しでも多くの方に知ってもらおうと竹嶋弘子さん(浜改田)がその様子を紹介してくれました。

竹嶋 弘子

ショックや生活の変化で生じた「心の空白」を埋めるお手伝いをする。ことなか、自治組織や趣味のサークルなど住民同志の「輪」づくりのサポートなどを目指しています。機器の設置には、工事費と一年間のレンタル料を合わせて一台七千六百八十四円が必要なのです。生活の苦しいお年寄りに負担を求めたのではなく、全国の心ある方々に寄付をお願いをしています。

ボランティアで活動されている一人にトランク運転手で森本佳代子さんという人がいます。森本さんはあの日、仕事途中だった神戸で地震にあい、二歳の坊やと一緒に九死に一生を得た人です。あの時、偶然眠っていた坊やがミルクを飲しがり泣き出したためにトランクを国道四十三号線の一番左の車線へ寄せて止めた。その時に大地震が揺れ、運転席に付けていたテレビもそばにいた坊やも吹っ飛ば

でしまつて、気がついた時にはすぐ先で崩れた高速道路に仲間の車が突っ込んで潰れていたそうです。あの時、坊やがミルクをせがんでいなければ、自分も子供も生きていなかったと思うから、自分は「トランクさえあれば、また働くことが出来る」といって、貯金していた百万円をおろして物資を買い、被災地に届けて回った人です。夢のような光景を見て苦しい生活をされている、特に高齢者の方々に放置することができず、今なお古い家具や中古の家電器具、生活用品などの調理をしては現地に届け「ベルボックス」設置のための資金集めに苦勞されています。自分で生きていく力のある方々は「自身で頑張っていたんだ」と思いますが、ですが、そんな力のない障害者や、高齢者の方々は別だと思えます。あのときせっかくな、助かった大切な命です。こんな形での「死」は悲しすぎます。私がおこにこのような文を寄せさせていたで、一人で多くのお年寄りの方、「ベルボックス」と暖かいたくさんの方々からの「心」が届きましたら、幸せに思います。※お問合わせ ナポレオン和歌山 森本佳代子(〒690-62 和歌山県那賀郡岩出町新田広芝九七一七)

みんなの



うみがめの来る浜



青空の広がった九月十一日、浜改田の海岸で三和小学校の一年生二十九人がうみがめの放流を行いました。身長四と五坪の子がめを手を持った子供たちは、「子がめにさわったのは初めて。かわいい。大きくなってまた戻ってきて欲しい」と大喜び。波打ち際を海に向かって、ゆつくりと進む子がめたちに向かかって、「がんばれ、ちゃん」と大きくなれ」と言葉を送りました。

今年が猛暑のせい、三百四十個産みつけられた卵から、わずかに五十二匹しかふ化しなかったとが、うみがめはおおよそ七週間かけてふ化するそうで、気温三三、三四度が適温だそうです。



この日、子供たちが放流したうみがめは五十二匹。浜改田にお住まいの植瀬昇一さんが、産みつけ



うみがめが放置されている始末

うみがめの来る浜は南国市が誇るべき財産。自然破壊が進み環境問題が叫ばれている昨今、この日放流したうみがめに、再び、この浜へ戻って来てほしいと望む子供たちの夢を、かなえていくためにはどうすればいいのでしょうか。

